

## 連続コンビニ強盗犯の特徴と 犯行地選択について

岩見 広一\*

### Offender Characteristics and Offense Site Selection of Serial Convenience Store Robbers

Hirokazu IWAMI\*

This study examines offender characteristics and the offense site selection process of serial convenience store robbers. Data on offenders arrested throughout Japan were collected, resulting in 698 robberies committed by 197 offenders that were utilized for analysis. The content rate of offenders' residences on the circle hypothesis (Canter & Larkin, 1993) and the suspicious area model (Hanyu, 2005) increased in tandem with an increase in the number of offense site(s). The content rate of four or more series was 71.0% for circle hypothesis, and 59.4% for suspicious area model (overlap area of both models = 56.5%).

**key words:** serial convenience store robbers, selection of offense sites, prediction of offender's base

#### 問題と目的

犯罪者プロファイリングは、同一犯の事件を抽出し、犯人の特徴や居住圏、今後の犯行予測をする捜査支援技術である。この技術は、観察可能な人間の選択行動から、他者の属性を推論する社会的推論に関する心理学的研究の枠組みに含まれると考えられる。この技術が、発生頻度の高い未解決事件へ適用できれば、日常業務として定着するであろう。そのため、本研究では、発生頻度が比較的高い凶悪事件のひとつであるコンビニ強盗に焦点を当てる。

わが国では、平成16年から平成24年までの間に、コンビニ強盗の年間認知は平均680件であり、年間検挙率の平均は60.0%であった。同期間における住宅強盗、金融機関強盗の認知及び検挙率の年間平均は、それぞれ452件(62.6%)、99件(79.9%)であった。3種の強盗事件の中では、コンビニ強盗の認知が最も多く、かつ検挙率の低い事件となる(警察庁, 2013)。

コンビニ強盗は、住宅や屋外の強盗から比べれば、犯行対象の所在地が明白で、その数も少ないため、犯行の可能性がある場所を絞り込みやすいと考えられる。また、被害店舗から犯人の居住圏を推定できれば、捜査対象者を探す重要な手掛かりのひとつとなる。犯人の居住圏を示す測度

のひとつとして、犯行移動(journey to crime: JTC)距離があげられる。わが国では、犯行地から犯人の住居等拠点までの直線距離をJTC距離に用いることが多い。岩見・龍島(2005)は、北海道で発生検挙したコンビニ強盗犯89名のJTC距離を研究した。その結果、都市規模及び移動手段によってJTC距離は有意に異なることが示された。しかしながら、同研究のサンプルは北海道のみであり、8割強は犯行が1件のみの単発犯であり、半数近くは発生当日に検挙されていた。

一方、連続コンビニ強盗犯は、発生当日に検挙されることが多い単発犯と異なり、逮捕を免れながら繰り返し犯行に及ぶ。警察が一連事件を早期解決するためには、連続コンビニ強盗犯に関する犯人像、犯行地選択を理解した対応が必要であるが、わが国にはその研究知見が存在しない。また、連続犯の居住圏推定では、JTC距離だけではなく、サークル仮説(Canter & Larkin, 1993)、空間平均を中心とした疑惑領域(羽生, 2005)を代表とする拠点推定モデルが利用可能である。両モデルは、犯行地情報のみで領域を作成できるため、犯人の拠点情報がなければ領域を作成できないJTC距離よりも簡便に使用できる手法である。サークル仮説は、連続犯の犯行地のうち、直線で最も遠い2地点を直径とした円を描き、その中に犯人の犯行地と住居が含まれるという仮説である。一方、空間平均を中心とした疑惑領域は、連続犯の犯行地の空間平均から各犯行地までの直線距離の平均値を半径とした円を描き、その中に犯人の住居が含まれるという仮説である。連続コンビニ強盗における両モデルの適用度は検証されていない。また、実務では、両モデルの重複領域における犯人居住が期待されているが、その仮説を検証した研究は皆無である。

したがって、本研究では、他者の属性推定のために、全国で発生検挙した連続コンビニ強盗犯の時間的、地理的な犯行行動と犯人特徴との関連についての分析を目的とする。

#### 方 法

分析対象は、2003年から2009年までの間に、全国で検挙された連続コンビニ強盗犯の事件資料のうち、JTC距離が計測可能な197名による犯行698件とした。犯行行動は、犯行時間、犯行地の都市規模、最短犯行間隔、犯行件数、サークル仮説及び疑惑領域の円半径である。連関を検討した犯人特徴は、犯人数、犯罪経歴、土地鑑、移動手段、サークル仮説及び疑惑領域の円内居住、JTC距離である。なお、距離、犯行間隔及び犯行件数は、連関分析のために、33%点、66%点で3分割した。

連関分析は、 $\chi^2$ 検定もしくはFisherの直接確率法を実施し、5%水準で有意な結果を採用した。さらに、Cramer's Vで対称性を確認のうえ、残差分析において5%水準で有意な結果について解釈した。

\* 北海道警察本部科学捜査研究所

Forensic Science Laboratory, Hokkaido Prefectural Police Headquarters, North 2, West 7, Chuo-ku, Sapporo-shi, Hokkaido 060-8520, Japan

Table 1 犯行行動と犯人特徴の連関分析結果

犯行行動	犯行行動との連関が認められた犯人特徴(%)
犯行時間	朝:車両等なし(46.2), 昼:車両等なし(66.7), 夜:共犯(25.9), 未明:車両等(85.6), 自動車(61.5), サークル仮説・疑惑領域外居住(57.7)
都市規模	都市型(人口10万人以上) 単独犯(88.7), 自動車なし(59.1), サークル仮説・疑惑領域外居住(56.5), 最長JTC2.8km未満(47.8), 車両等なし(29.6) 地方型(人口10万人未満) 犯罪経歴なし(75.9)
犯行間隔	最短1日以下 自動車(81.1), サークル仮説・疑惑領域外周内居住(71.7), 疑惑領域内居住(64.2), 犯罪経歴(64.2), サークル仮説・疑惑領域重複領域内居住(58.5), 最短JTC3.5km以上(54.7), 共犯(47.2) 最短2~9日以下 なし 最短10日以上 単独犯(91.0), 犯罪経歴なし(67.2), サークル仮説・疑惑領域外居住(61.2), 最長JTC2.8km未満(46.3)
犯行件数	2件 土地鑑(93.5), 単独犯(88.5), サークル仮説・疑惑領域外居住(67.8), 犯罪経歴なし(57.5), 最長JTC2.8km未満(44.8), 車両等なし(31.0) 3件 なし 4件以上 車両等(91.3), サークル仮説・疑惑領域外周内居住(73.9), サークル仮説内居住(71.0), 疑惑領域内居住(59.4), サークル仮説・疑惑領域重複領域内居住(56.5), 最長JTC13.2km以上(53.6), 共犯(37.7), 土地鑑なし(26.3), バイク(14.5)
サークル仮説半径	1.1km未満 土地鑑(95.1), 単独犯(93.8), 最長JTC2.8km未満(78.5), 疑惑領域外居住(76.9), 窃盗歴なし(75.4), サークル仮説外居住(73.8), 自動車なし(70.8), 犯罪経歴なし(60.0), 車両等なし(46.2) 1.1~5.7km未満 土地鑑(96.3), 最長JTC2.8~13.2km未満(66.2), 自転車(29.2) 5.7km以上 自転車なし(92.5), 自動車(77.6), 最長JTC13.2km以上(83.6), サークル仮説・疑惑領域外周内居住(71.6), サークル仮説内居住(68.7), 疑惑領域内居住(65.7), 犯罪経歴(65.7), サークル仮説・疑惑領域重複領域内居住(62.7), 最短JTC3.5km以上(62.7), 窃盗歴(46.3), 共犯(40.3), 土地鑑なし(30.4)
疑惑領域半径	0.9km未満 土地鑑(95.2), 単独犯(93.9), 最長JTC2.8km未満(78.8), 疑惑領域外居住(78.8), サークル仮説外居住(74.2), 窃盗歴なし(77.3), 同居者なし(71.2), 自動車なし(69.7), 犯罪経歴なし(62.1), 車両等なし(43.9) 0.9~4.8km未満 土地鑑(96.4), 最長JTC2.8~13.2km未満(66.2), 自転車(27.7) 4.8km以上 自転車なし(92.4), 最長JTC13.2km以上(83.3), 自動車(80.3), サークル仮説・疑惑領域外周内居住(69.7), サークル仮説内居住(66.7), 疑惑領域内居住(63.6), 犯罪経歴(63.6), サークル仮説・疑惑領域重複領域内居住(60.6), 共犯(39.4), 土地鑑なし(31.5)

※残差分析の結果、5%水準で有意な結果は下線あり、1%水準で有意な結果は下線なし。

結 果

Table 1 のとおり、犯行時間、都市規模、犯行間隔、犯行件数、サークル仮説及び疑惑領域の円半径は、多数の犯人特徴との間に有意な連関が認められた。

犯行時間は、移動手段の違いと関連が高く、夜間や未明は車両等を用いた犯行の割合が高く、日中はその割合が低かった。JTC 距離は、都市部で短く、都市犯行を含む都市地方混合型では、JTC 距離が長くなった。

サークル仮説及び疑惑領域の円内犯人居住率が高い連続犯の犯行特徴は、都市地方混合型の犯行、未明の犯行、犯行4件以上、長い円半径であった。犯人特徴は、自動車を含む車両等の使用率が高く、JTC 距離は長い傾向が認められた。また、共犯や土地鑑なし、犯罪経歴や窃盗歴を有す

る犯人の割合が高かった。さらに、サークル仮説及び疑惑領域の重複領域内居住率は、6割と高いものであった。

一方、サークル仮説及び疑惑領域の円内犯人居住率が低い連続犯の犯行特徴は、都市型犯行、犯行2件、犯行間隔10日以上、短い円半径であった。犯人特徴は、単独犯、土地鑑があり、自動車等の移動手段が少なく、JTC 距離は短く、犯罪経歴なしの割合が高かった。

さらに、犯罪経歴がある者や共犯事件は、犯行間隔が短く、サークル仮説及び疑惑領域の円半径が長かった。犯罪経歴がない者には、その逆の傾向が認められた。

考 察

本研究の結果、犯行行動に基づいて人物属性を推論できる可能性は、いくつか示唆できたと考えられる。

まず、都市型、少ない犯行件数、長い犯行間隔等の犯行行動は、JTC 距離が短く、犯行の行動圏の狭さに関連すると考えられた。特に、店舗数の多い都市部という環境は、犯人が居住地から比較的近い店舗を犯行対象に選択したことを示唆する。ただし、サークル仮説や疑惑領域は狭く、犯人の居住圏として利用できないケースが多かった。

次に、都市地方混合型、犯行件数の多さ、自動車使用、共犯等の犯行行動は、JTC 距離が長く、犯行の行動圏の広さに関連すると考えられた。サークル仮説や疑惑領域は広範囲となったが、犯人居住率は高くなった。しかも、両モデル重複領域内の居住率の高さは、実務の仮説を支持する結果であり、捜査範囲を狭めるひとつの指標になろう。

さらに、犯罪経歴者や共犯による犯行は、犯行間隔が長く行動圏が広域であったが、犯罪経歴がない者や単独犯の犯行では、逆の行動傾向が認められた。それぞれの犯人特徴から、前者は大胆な態度、後者は静観な態度という異なる側面が見受けられる。しかしながら、双方の行動傾向は、逮捕を回避しながら犯行を重ねようとする、連続犯ならではの狡猾な基本戦略という共通点が示唆できよう。

引用文献

Canter, D., & Larkin, P. 1993 The environmental range of serial rapist. *Journal of Environmental Psychology*, 13, 63-69.

羽生和紀 2005 連続放火の地理的プロファイリング—サークル仮説の妥当性の検討— *犯罪心理学研究*, 43(2), 1-12.

岩見広一・龍島秀広 2005 捜査支援を目的としたコンビニ強盗事件の局地的研究 *犯罪心理学研究*, 43 (特別号), 98-99.

警察庁 2013 平成 24 年の犯罪

(受稿: 2016.3.2; 受理: 2016.5.20)